

「米山新田(よねやましんでん)と米山用水(堰溝、ゆみぞ)」

米山用水は、三重県伊勢市横輪町(よこわちょう)の横輪川の米山用水頭首工(とうしゅこう、写真②、河川から用水の取り入れ口、おせん淵の少し下流)から上野町を通過、円座町(えんざちょう)まで続いています。全長約 7.6km あります。円座町の人々は米山用水を『堰溝(ゆみぞ)』と呼んでいます。ここでは米山宗隆(むねたか)さんと米山宗持(むねもち)さんの功績に敬意を表して、米山用水と記載します。

1 米山新田と米山用水

(1) 昔、沼木村(ぬまきむら)円座(現在の三重県伊勢市円座町)は少し高台にあるため、宮川が村のすぐとなりで流れているにもかかわらず、水利が悪く、ほとんど荒地になっていました。そのため、米の収穫量(しゅうかくりょう)は少なく、村の人々は麦(むぎ)やあわ(参考①)を食べて、苦しい生活をしていました。

(2) 江戸時代の 1689 年に、紀州藩(きしゅうはん)円座組の大庄屋(おおじょうや、参考②)であった米山家 4 代の米山宗隆(むねたか、参考③)さんを中心に、村の人々と力を合わせ、新田(しんでん、参考④)をひらき、約 5.5 km の水路(参考⑤)の工事を始め、7 年後の 1696 年に工事は完成しました。水は上野町にある大熊山(おぐま、参考⑥)の谷川から引きました。機械の無い当時は、鍬(くわ)でみぞを掘り、高い所はけずり、「もっこ」(参考⑦)で土を運び、低い所を埋(う)め立てる重労働(じゅうろうどう)の仕事でした。これにより県道伊勢南島線(なんとうせん)沿いの約 7 ヘクタール(参考⑧)の良い田を得ました。水路の水のおかげで、新田には、稲(いね)が実(みの)り、畑には、茶やこうぞ(和紙の原材料となる植物)が栽培(さいばい)されました。

(3) さらに、これから 130 年以上経って、用水路は土手がぐずれ、土砂(どしゃ)がたまり、雑草がしげって使えなくなっていました。水が入らない新田は、3 ヘクタールしか米を作ることができませんでした。9 代の米山宗持(むねもち)さんはその水路が荒れているのを見て、前の美しい水田にしたいと考えました。滋賀県の信楽(しがらき)にあった代官所(だいかんしょ)に工事の願いを出しましたが、許可(きょか)されませんでした(参考⑨)。そこで、江戸(今の東京)に行き、江戸幕府(ばくふ)の老中松平定信(ろうちゅう まつだいらさだのぶ)に申し出て、やっと許可をもらいました。

(4) 1829 年に工事を開始しました。横輪川より約 7.6km の水路を開く計画でした。横輪川の上流に堰(「いせき」または「せき」と読む、水を他へ引いたり、流量(りゅうりょう)を調整(ちょうせい)したりするため、水をせき止める所、写真③)を作り、横輪川の水を分けて流す工事でした。堰は土や石を積んで作りました。横輪川に並行(へいこう)して、大熊山(おぐま)と日向山(ひなたやま)のふもとに沿って、みぞを掘りました。水路の高さは、提灯(ちょうちん)のあかりで高さを決める提灯測量(そくりょう、参考⑩)で測(はか)りました。水路は台法寺山(だいほうじやま)をこえないと、水が円座に流れません。それで、約 150m のトンネル(隧道、ずいどう)を掘りました。トンネルは現在の上野台団地の近くで、サニードの下を横切って、通っています(写真⑬⑭)。方向磁石(ほうこうじしゃく、参考⑪)と水準器(すいじゆんき、参考⑫)を使って、トンネルの方向や傾(かたむ)きを決めて、石のみと槌(つち)だけで岩をけずり、土を「もっこ」を使って外に運び出しました。あかりは「がんどう」(参考⑬)を使いました。掘った所は木を組んで支(ささ)えを作りしました。1831 年に、7.6 km におよぶ長い水路がほぼできあがりました。

(5) この 1831 年の 7 月に大雨が降り洪水(こうずい)によって、せっかく作った水路は切れて、トンネルもぐずれ、水路のほとんどは使えなくなりました。ここで、宗持さんはあきらめませんでした。米山家の財産(ざいさん)をすべて投げ出し、かつ米山新田を担保(たんぽ、借金のかたに保証(ほしょう)として差し出す物)にして、借金をしました。1832 年にもう一度、工事を再開(さいかい)しました。トンネルには、愛知県の三河(じょうぶ)な石(参考⑭、写真⑯)で支えをしました。現在は大水が出た時に、あふれた水を横輪川にもどす仕組み(「うてび」と呼ばれる、参考⑮)がいくつかの所にあります。水路には、「うてび」の標識(写真は第 1 うてび)がありますので、注意して見ましょう。また、大雨の時、流量(りゅうりょう)によって自動的に動く「転倒ゲート」(参考⑮、写真⑰⑱)も設置(せっち)されています。



(6) こうして、米山用水はやっと完成し、新田の約 10 ヘクタールと廃田(はいでん、使われなくなった田)になっていた田の約 27 ヘクタールに灌漑(かんがい、水を引くこと)することができました。村人は用水を引いた水田で米作りにはげみました。

(7) 宗持さんはこの工事に私財 1389 両(参考⑩)を投じただけでなく、円座村は新田を担保(たんぼ)に 1000 両の大きな借金を背負い込みました。この後、不運にも、大凶作(だいきょうさく、農作物の生産が非常に悪いこと、天保の大飢饉(てんぼうのだいききん))(参考⑪)にあい、米の収穫(しゅうかく)が減って、借りたお金が返せなくなりました。返せない、担保にした新田を取られてしまいます。宗持さんは借金の責任を取って、1839 年 1 月 23 日にみずから切腹(せつぷく)して命を絶(た)ちました。宗持さんはこの時、53 歳でした。

(8) その後、1876 年(明治 9 年、11 代の宗寿(むねとし)さんの時)に 1000 両の借金を返すことができました。

(9) 1885 年(明治 18 年)に、円座村をはじめ、上野村、神菌村、横輪村、下村、菖蒲村、上村、床ノ木村、沼木地区外の三重県内、および三重県外の有志の人々は米山宗隆さん、宗持さんの立派(りっぱ)な仕事に感謝(かんしゃ)して、米山新田の真ん中に、円座邨(村)墾田碑(えんざむらこんでんひ)をたてました(写真⑳㉑)。その功績(こうせき)を今も世の中の人々に伝えています。沼木地区の先人(せんじん)の知恵や自己犠牲(ぎせい)をいとわれない心に、今の私たちは学ぶところが多いです!

(10) 1975 年(昭和 50 年)に、南伊勢広域農道(サニーロード)の開通工事のさいに、サニーロードの下を横切っているトンネルがうまってしまわないように、伊勢市役所がトンネルをコンクリートで修理しました。

(11) 円座町の人々は米山用水を『堰溝(ゆみぞ)』、頭首工を『奥の堰(おくのゆ)』(参考⑫)と呼んでいます。現在、米山用水は 3 面がコンクリート製の溝に改修されています(改修時期は不明)。

(12) 毎年、春の田植えの前になると、円座町の住民は「出合」(であい、地域の協働(きょうどう)作業)で、用水路の掃除や、土手の草刈りをして、田に水を入れる準備をします。田植えが始まると、順番に用水路の見回りを行います。必要に応じて、水の流れを調節します。壊(こわ)れたところあれば、出合って修理します。(参考⑬)

【参考】

参考①: あわ: 中国からもっとも古く、伝わった穀物。直径約 1.5mm で小粒。明治の始めは米より栽培量が多かった。明治末期まで主食のひとつ。

参考②: 紀州藩: 江戸時代に紀伊国(きのくに)、今の和歌山県と三重県南部)と伊勢国(いせのくに)の南部(1619 年から紀州藩領)を支配した藩。藩主は紀州徳川家。伊勢国を治めるために、松阪城に城代(じょうだい、藩主の代わりに城を管理する家臣)をおいた。玉城町の田丸に田丸代官所があった。

円座組: 組には、42 ケ村あり、1 万 2 千石あった。江戸時代の円座、上野、神菌だけではなく、広い地域を含んでいた。横輪と下村・菖蒲・上村・床の木(現在の矢持町)は(江戸)幕府直轄領(俗称として、天領ともいう)に属して、四日市代官所、信楽(しがらき)代官所の支配下にあった。円座村は江戸時代には戸数 50 戸との記載がある。

大庄屋(おおじょうや): 江戸時代の最上位の村役人、身分は農民であるが、米山家は紀州藩の地士(じし)であった。

地士(じし)制度: 紀州藩は地域の有力者に対して、土着のまま、武士の身分として取り立てた。苗字帯刀(みょうじたいとう、姓を名乗り、太刀(たち)を腰に差す武士の特権)を許され、村々を統治した。

参考③: 米山宗隆(むねたか): 元々、姓は越賀(こしか、出身の(志摩市の)越賀が由来)で、名は多一郎であった。断絶していた米山家を継いだ時に改名した。父の越賀隆春(たかはる)が丹波(たんば)の綾部(あやべ)から 1635 年に円座村に隠退(いんたい)した時に、従ってきた。米山用水を開発する前に、紀州藩から命ぜられて、多気町にある五桂池(ごかつらいけ)の灌漑用溜池(かんがいようたためいけ、三重県で最大)を、大庄屋の三谷吉左衛門とともに、元締(もとじめ)として、造った(1679 年完成)。

参考④: 新田と新田開発: 日本では、戦国時代に、各大名が国の力を高めるために、米の増産、農地開拓に取り組んだ。戦国時代末期から江戸初期に人口が増加したが、食糧が不足し、主食の米が必要とされた。江戸幕府や各藩のすすめのもと、役人や豪農や商人が中心となって、湖などの埋め立て、台地や谷間の湿地帯などの内陸部の荒れ地でも新田の開拓が行われた。新田開発は大規模な工事で大量の用水を導いて、それまで水利のよくなかった台地や扇状地の中央まで行われた。米山新田はこの例の一つである。江戸時代初期に全国で 1800 万石(石高(こくだか)で土地の生産性を表した。1 石(こく)はおとな一人が 1 年間で食べる米の量に相当。成人男性で 1 日に玄米 5 合。米の 1 石=10 斗(と)=100 升(しょう)=1,000 合(ごう)。約 180.39L。)から後期には 3000 万石に、倍近く増えた。新田開発のためには、測量技術の進歩があった。新田開発は非常に大きな利益も期待できたが、開発の困

難さから資金難のリスクもあって、投資した商人には破産する者もあった。また、新田は、古くからの農地より自然災害のリスクの高い土地が多くあった。

本田(ほんでん):江戸前期の総検地によって決定された田、畑、屋敷。新田:江戸前期の総検地以降に開発された田、畑、屋敷。

新田は本田に対する語。墾田(こんでん):新開発地は古くは墾田といわれた。(例)奈良時代の墾田永年私財法(こんでんえいねんしざいほう)⇒墾田は永久に私有地とすることを認めた法(743年発布)。

参考⑤:米山宗隆が開発した約5.5kmの水路は、現在「野田崎古溝(のださきここう)」と呼ばれている。米山用水と米山新田の工事に数千両(後述の参考⑩を参照)を使った。

参考⑥:大熊山:上野町の人は「おぐま(やま)」と呼んでいる。神岳(かみがだけ)のふもと付近にある小高い山。横輪川の北側に、南から順に、おぐま、日向山(ひなたやま)、台法寺山(だいほうじやま)がある。今の上野台地のある場所は台法寺(だいほうじ)と呼ばれていた。

参考⑦:もっこ:縄や竹・つるを編(あ)んで作った土砂の運搬道具。人がかっぴたり、せおったり、手で持って運んだ。昭和の初期まで、土木工事は、この「もっこ」で土をいっぱい入れて、棒でかっぴいで、運んでいた。

参考⑧:1ヘクタール=100m×100m=1万平方メートル=約1町。

参考⑨:代官所:今の滋賀県甲賀市の信楽(しがらき)に「信楽役所」と呼ばれた代官所があった。代官は近隣の灌漑を害すると、許可を与えなかった。信楽代官所に行ったのは、頭首工のある横輪は江戸幕府領のためであったと考えられる。四日市にも代官所があったが、享和元年(きょうわがねん、1801年)以降、信楽代官多羅尾(たらお)氏の支配を受けて、四日市には出張陣屋が置かれた。中世から農業用水をめぐる争いは日本各地で多発し、死活問題であった。

参考⑩:提灯測量:江戸時代から明治時代において、提灯を棒に立てて、夜間に目印として高低差を測量した。多くの人々が提灯を持って並び、提灯の高さを調節することにより測量した。

参考⑪:方向磁石:江戸時代後期に地理学者伊能忠敬(いのうただか)は日本各地を測量して、精度の高い日本地図「大日本沿海輿地全図(えんかいよちぜんず)」を作成した。このとき、「小方儀(しょうほうぎ)」という方向磁石を使った。

参考⑫:水準器:江戸時代の水準測量は角材の1面に長いみぞを掘り、その中に水を注いで水平の基準面を定めた。この水準器は水盛り台(みずもりだい)と呼ばれた。一般に水準測量を「水盛り」と称した。

参考⑬:がんどう:江戸時代に発明された携帯用ランプの一種。正面のみを照らし、桶(おけ)状の外観をして、中央にロウソクが固定された。金属製、木製がある。

参考⑭:三河の石(写真⑩):愛知県の三河にある岡崎市は市内の山から切り出される良質な御影石(みかげいし)と技術力のある石工(いしく)職人で知られている。花崗岩(かこうがん、マグマが深い所で固まった深成岩の一種)は石材になると、御影石と呼ばれる。

参考⑮:うてび(写真⑦~⑩):漢字は打樋。樋(とい)は水を送り流すもの。転倒ゲート(写真⑫⑬):洪水時に流量が多いと、ステンレス製の油圧シリンダーが作動し、ゲートが倒れて水路の水を横輪川に戻す。(制作年月:昭和57年(1982年)3月、松阪市の宇野重工株式会社製)

参考⑯:1両の価値:単純に比べることはできない。同じ江戸時代でも、時期や場所によって、値段が異なる。また、何と比べるかでも大きく異なる。米の価格で比べると、1両は江戸初期で10万円、中期~後期で3~5万円、幕末で3~4千円という評価(山梨県立図書館の資料による)もある。あくまでも参考である。

参考⑰:天保の大飢饉(てんぼうのだいききん):江戸時代後期の1833年(天保4年)から1839年まで続いた。江戸時代三大飢饉の一つ。洪水や冷害があり、大凶作になった。米価・物価が高騰し、非常に多くの餓死者と病人を出した。百姓一揆や大塩平八郎の乱(1837年)が起り、老中水野忠邦(ただくに)の天保の改革(1841年~1843年)につながった。

参考⑱:堰溝(ゆみぞ)、奥の堰(おくのゆ):円座町では、近年、「堰(ゆ)」ではなく、「湯」が慣用的に使われてきた。円座町の方から、「ゆ」に対して、「堰」と表記したほうが良いのではとの指摘を受けた。著名な民俗学者柳田國男の著書『故郷七十年』の中にも「堰溝(ゆみぞ)という灌漑用水の掘鑿(くつさく)」との記述がある。「堰溝(ゆみぞ)=灌漑用水」と考えられる。ご指摘ありがとうございます。

頭首工にある工事銘板(めいばん)(写真⑥):これによると、頭首工は1959年に復旧工事(工事名:昭和33年度災害復旧事業、竣工(しゅんこう):昭和34年8月15日、伊勢市円座町の森組が施工)が行われた。

参考⑲:米山用水は、サニーロードの下を横切って、上野町の日向(ひなた)に入り、アジサイの植えてある所と並行している(写真⑮)。米山用水は上野町の日向を通っているため、円座町と上野町の取り決めで、日向の田んぼに水を分けるために、水路の側壁に穴が数か所開けてある。

2 円座邨(村)墾田碑(えんざむらこんでんひ)

円座邨(村)墾田碑(写真①)は1885年(明治18年)に、当時の円座村をはじめ、上野村、津村、神藪村、佐八(そうち)村、横輪村、下村(しもむら)、菖蒲(しょうぶ)村、上村(かみむら)、床之木(いすのき)村、沼木地区外の三重県内、および三重県外の有志の人々によって、米山宗隆(むねたか)、宗持(むねもち)の功績(こうせき)に賛同(さんどう)して、米山新田の真ん中にたてられた。墾田碑は地域の人々の生活を豊かにするためにつくした二人の功績を今も世の中の人々に伝えている。碑の上部には元紀州藩主徳川茂承(もちつぐ)の篆額(てんがく)が添えられている。碑の文章は明治の漢詩人(かんしじん)、衆議院議員で松阪市射和(いざわ)出身の矢土勝之(やづちかつゆき)が作成した。以下は、この文を中村澄夫さんが解説(かいどく)したものをもとにして、簡略化し、かつ現代語になおしたものである。

円座村墾田碑(要約)

伊勢の国(いせのくに)度会郡(わたらいぐん)の円座村は、昔、紀州藩主(きしゅうはんしゅ)の治める地域であり、米山氏はこの土地の人々から信頼(しんらい)されている家の出身である。4代の宗隆(むねたか)さんは、この地域の荒れ地を嘆(なげ)いて、荒れ地を開墾(かいこん)する決心をし、これに専念(せんねん)した。この村の人々も喜んで、この仕事に参加した。遠くから谷川の水を引き、50町(1町=約109mなので、約5.5km)の長さの水路を作った。これによって、水田を5町(約5ヘクタール)と畑を2町(約2ヘクタール)得た。1691年(元禄4年)に、紀州藩は米山宗隆をほめたたえ、ほうびを与えた。

それから140年後、用水路は水路として役に立たず、田には雑草がはえる状態であった。9代の米山宗持(むねもち)さんは、祖先のした事業(じぎょう)が荒れ果てているのを見て、再興(さいこう)しようと働いた。石でできたトンネルを作ったが、これは長さが60間(けん)(1間=1.82mなので、約109m**)であった。灌漑(かんがい)用水路をなおして整備することによって、新田が14町(約14ヘクタール)得られ、以前の田も含め、昔のように美しい田となった。これは横輪川をじょうずに利用した水利(すいり)事業であった。1831年(天保2年)7月に、紀州藩主はすばらしい業績(ぎょうせき)にたいして、米山宗持にほうびとして二人扶持(ふたりぶち***))を授(さず)けた。

この文は米山宗寿(むねとし)さん親子の求めに応(おう)じて、矢土勝之(やづちかつゆき)が書いた。

* 碑文において、内容が不明なところは省いた。大幅に簡略したところもある(碑の拓本は写真②)。

書は明治の著名な書家である巖谷 修(いわやしゅう)による。号は一六(いちろく)。

** 他の資料では、約150mとなっていて、一致していない。碑文は残念ながら、現在、こけが生え、汚れもひどく判読できない。

*** 二人の大人が1年間に食べる量の米が与えられた。

3 弁天(べんてん)さん

米山宗隆(むねたか)は水路(約5.5kmで、現在「野田崎古溝」(のださきこう)と呼ばれている)を工事の際、水路の安全を祈願(きがん)するために、滋賀県(しがけん)の琵琶湖(びわこ)の北部に浮(う)かぶ竹生島(ちくぶしま)にある宝巖寺(ほうごんじ*)・都久夫須麻神社(つくぶすまじんじゃ)で祀(まつ)られている弁才天(べんざいてん**)を勧請(かんじょう***)した。米山新田の円座村墾田碑のすぐ後ろに祀られている(写真①)。円座町の人々は親愛(しんあい)を込めて、弁天さんと呼んでいる。

* 竹生島神社(ちくぶしまじんじゃ)とも呼ばれる。 ** 日本三大弁才天の一つ。弁才天は水に関係する神様で、七福神のひとり。

*** 離れた土地から分霊を迎えて祀ること。

【参考文献】

西野儀一郎、『ふるさとの人物風土記』、度会の巻、p. 66-71。この解説は西野儀一郎著の資料などをもとに作成しました。西野儀一郎さんに深く感謝いたします。また、資料の提供、原稿の校正などをしていただいた円座町の方々および沼木まちづくり協議会のスタッフの皆さん、ありがとうございました。
(作成責任者: 沼木まちづくり協議会・立花和也) 2023年2月25日

【他の資料】

- ① 3・4年社会科『わたしたちの伊勢市』、5地域のはってんにつくした人々、p.106-113、令和3年度版(伊勢市教育委員会・社会科副読本資料作成研究会編); 写真とイラストで平易な説明がある。15代の米山公美(きみよし)さんのインタビュー記事も掲載されている。
- ② 歴史教材『ふるさと伊勢』、米山新田、p.12、令和2年度(伊勢市教育委員会); 小学6年~中学3年向け。

「沼木学びウォーク:米山用水(堰溝)のルートをとどる」

沼木まちづくり協議会・沼木こども自立塾委員会とイベント委員会の共同企画

2022年12月11日(日)8:30~12:00 実施

米山用水(堰溝、ゆみぞ)は、三重県伊勢市横輪町の横輪川の米山用水頭首工(とうしゅこう、河川から用水の取り入れ口、おせん淵の少し下流)から上野町を通過、円座町まで続いています。全長約7.6kmあります。全ルート歩く、大人でも3時間以上かかります。また、危険(きけん)と思われる所もいくつかあります。そのために、当日は歩いて見る所と車で移動する部分を組み合わせて、米山用水のルートをとどりました(写真①~⑮、⑳~㉓)。

8:30:①沼中グラウンド集合⇒みどり保育園バス&レンタカーで横輪川の①米山用水頭首工へ
⇒9:00ごろ:ウォークスタート⇒転倒ゲートまで歩く⇒②少し戻って宮川パークランド付近の倉ヶ谷橋(くらがたにはし)を渡る⇒車⇒③日向(ひなた)からウォーク再開⇒④上野小学校近くを通る⇒⑤米山新田⇒⑥円座郵便田碑まで歩く。米山用水についての米山公美(きみよし)さんの説明⇒⑦車で沼中グラウンド(12:00 解散)





①サニーロードから橋を渡り頭首工へ



②横輪川の米山用水頭首工(右奥が取入れ口)



③横輪川の堰
(いせき、せきともいう)



④米山用水の取入れ口
(左側が横輪川)



⑤米山用水の取入れ口



⑥頭首工にある工事銘板
(参考⑩を参照)



⑦第1うてび(全体)
左が横輪川



⑧うてび(上側が用水路)
水量が多いときは下側の水路で横輪川に戻す



⑨うてび細部(上側が用水路)



⑩うてび(水量が多いとき
右側の水路で川に戻す)



⑪前方に大きい岩。
土砂と落ち葉の
流入防ぐために
鉄板が敷いてある



⑫転倒ゲート



⑬洪水時に転倒ゲートのステンレス製の
シリンダーが作動し、ゲートが倒れる
(前方中央にゲートのシリンダーがある)



⑭倉ヶ谷橋(くらがたにはし)



⑮上野町の日向を通る米山用水
(アジサイの下側の水路)



⑯台法寺山を貫く約150mのトンネル
(隧道、ずいどう)の入口(前方奥)



①約 150mのトンネルの出口
(上野台からサニーロード
沿いの反対側)



⑧トンネルに使用された三河産の
花崗岩の石材の一部(長さ約 1m)



⑨米山用水(上野台付近)



⑩円座町の米山用水



⑪円座邨(村)墾田碑と弁天さん
(弁天さんは写真の左側)



⑫円座邨墾田碑の拓本
(米山氏所蔵)
上部には元紀州藩主
徳川茂承(もちつぐ)の
篆額(てんがく)が添え
られている



⑬米山さんの説明を聴く(墾田碑の前)

沼木まちづくり協議会

住所：〒516-1104 三重県伊勢市上野町 823 (旧沼木中学校『沼中』)

TEL: 0596-39-7240 FAX: 0596-39-7241

メールアドレス：info@numakijin.com

ホームページ：<https://numakijin.com/>